

平成 22 年 11 月 16 日

ISAF・ORC 2010年 年次総会 報告

JSAF 国際委員会
オフショア担当
小林 昇

2010年の年次総会は、ISAFが11月4日から14日、ORCは5日から9日まで、ギリシャのアテネで開催された。私は6日午後の到着から11日午後の出発まで滞在し、ISAF関係委員会の出席・傍聴と、ORCのコンGRESSに出席した。JSAFからは前田専務理事・国際委員会の大谷・柴沼の各氏と計4名が出席し、ORCANからは本年は出席がなかった。

6日 午後にISAF及びORCに参加登録を済ませ挨拶にまわった。

7日 <エンピリカルハンディキャップサブコミティー>を傍聴、<コネクトツーセーリングセミナー>の後半を傍聴。

8日 <スペシャルレギュレーションサブコミティー>を傍聴する。
夜はORCディナーに出席。

9日 ORCのEGC（午前）とAGC（午後）に出席。

夜には、<ロレックスISAFワールドセーラーアワード2010>に出席。

10日 <オセアニックアンドオフショアコミティー>に出席

11日 午後、大阪に向けて出発

温暖な好天に恵まれ、タイトなスケジュールではあったが充実した会議への出席となった。

以下、傍聴・出席した会議の報告を記す。

<エンピリカルハンディキャップサブコミティー>

各国の独自のハンディキャップシステムを管轄するコミティーで、NORLYS（ノルウェイ）・LYS（スウェーデン）・PHRF（アメリカ）・RYA ポーツマスヤードスティック（英国）・PHRF Argentina（アルゼンチン）・HN（フランス）を主要なハンディキャップシステムとして継続的に扱っている。各国の代表者が委員会のメンバーを占めている。今年は出席委員が少なかった（3名）他傍聴者。

出席各国から自国の状況説明があり、より密接な横の連絡を取り合う事が話し合われた。

2004年から国際的あるいは各国独自のハンディキャップシステムやクラスルールの中で、性能評価に必要な艇の各部の名称や計測数値の定義を標準化しよう、とするワーキングパーティーがあったが現在は機能していず、これを<イクイップメントルールコミティー>に移管する事となった。

総じてあまり重要なコミティーではないと言う印象である。終了後、アメリカの委員である、ポールアンフィールド氏から日本における簡易ハンディキャップシステムの状況について質問を受け、全国統一的なシステムは無い、と答えたが何か必要な事があれば援助するので申し出てくれと言う事であった。

また、HFフランスのダニエルパイロン氏からは2010年版のガイドブックを今年も頂いた。近い将来英語版のウェブサイトも始めるという事なので、日本で統一的な簡易ハンディキャップシステムを施工する際には大いに参考になると思われる。

<コネクトツーセーリングセミナー>はISAFが力を入れている部門で、スポンサーも数社が付き、毎年幾つかの団体から活発なセーリング普及活動の報告がされている。

<スペシャルレギュレーションサブコミッティー>

今年も、数件のサブミッションが出され、これの検討がなされた。

また、判りやすい表現や構成を目指した改訂に関しては外部デザイナーに依頼してのフォーマットの検討が成されてきたが決定的なものは得られず、I S A Fの技術担当者からデジタルフォーマットでのSRの表現改良が出された。大変便利なプログラムであったが、委員からは文書版は作り続けるべきである事と、図版をもっと利用すべき、という意見が出た。

高い基準のカテゴリーを要求されるロングオフショアレースが下火の日本ではそれらのレースが開催される直前にトレーニングを実施する状況ではあるが、欧米ではカテゴリー1や2のレースが多く、先進国ではファーストエイドとシーサバイバルを内容とするトレーニングの開催が確立されて、SRのアペンディックスにもこの件の内容が明示されている。本年の会議前にI S A FからMNAに対して状況質問状が出され、その集計が発表された。日本からは回答しなかったようである。またSRのアペンディックスG<トレーニング>に落水者救助パターンを加えるサブミッションと、新しくアペンディックスNとして<メディカルトレーニング>を加える事がサブミッションの一部変更を加えて、承認された。

ワーキングパーティーの報告では、<ストーム・ヘビーウエザーセール>が2年を経てようやく報告された。内容は承認され、次年度にサブミッションとして整理の上で提出し、改訂に向かう事となった。

その他、特筆すべきは、スペシャルレギュレーションの最初に、<オフショアレーシング環境保全コード>として8項目の内容で提示する事が決まった。

その他、変更・追加事項の詳細はオセアニック・オフショアコミッティーの最終決定を受けて別途報告する。

<オセアニック・オフショアサブコミッティー>

2つの外洋系サブコミッティーを含み、オフショア事項を全般的に統括する機関で、スペシャルレギュレーションサブコミッティーの討議内容は、I S A Fのカウンシルに上げずに最終決定をする重要な委員会である。昨年にフィリップトルハースト委員長からジャックリーン委員長（フランス）に引き継がれ、新委員長は2010年に精力的に活動を行った。現在では、従来の<オセアニックサブコミッティー>を吸収して、非常に広範囲な項目をカバーする。

I S A Fは2000年以降、外洋レースを広く統括する動きを進めてきたが、この間にも幅広い外洋レースの世界の変化と発展が進み、昨年度からより明確な方向性への模索がエクゼクティブコミッティーの意向を元に進み始めた。これは新委員長の人選とも大きな関係があるようだ。

昨年からはまった、トランサット・ベンディグロブ等の著名なロングオフショアレースの主催者との合意書がI S A Fオセアニックコンコードとして合意され、向こう4年のレーススケジュールの調整や相互利益のために定期的に会合を持つ事になった。この分野のオセアニックレースはフランスが主流でもあり、この点での関係の深い事でもジャックリーン氏が委員長に選ばれたのでは、と思われる。

もう一つの注目すべき変化と言うか問題は、積年のORC（ORCレーティングシステム運営）とRORC（英国ロイヤルオーシャンレーシングクラブ、IRCの運営団体）との摩擦の解決であろう。2009年に、IRCオーナーズ協会が世界選手権の開催許可をI S A Fに提議した事で、この問題が表面化した。I S A Fのレギュレーションでは、ハンディキャップシステムを使った外洋レースはORCのそれのみが認定されている。近年のIRCの世界的な伸長に神経を尖らせてきたORCにとっては重要な問題で、本年の年次総会はどうなるのであろうか？と危惧されてきた。I S A Fは、2010年にこの問題の調整に乗り出しI S A Fレギュレーションの中でのORCの立場をより明確に改訂する事と、ORCとRORCとの新しい関係の成立を模索していく事、が合意された。前者はORCがサブミッションを提出し、後者は2011年に両団体のジョイントベンチャーとして世界統一レーティングシステムを運用する会社を設立する事が基本合意された。これは2010年2月にパリでI S A Fのエクゼクティブコミッティー代表とリーン委員長・OR

Cフィンチ会長・RORCのクリスリトル提督などが会合を持って合意された。ORCは今年の年次総会直前にこの方向性が取られた事を公表して我々を驚かせたが、RORC側からは未だ正式な発表はない。世界統一レーティングシステムはかつてIORとして成立し、これのIMSへの世界的な移行が不調に終わり、現在ヨーロッパ中心に強い分布を見せているORCと、旧英国連邦国を中心にこれもORCと同等の勢力を持つIRC、そしてIMSから離脱後独自の歩みを進める米国と言う混迷状況となっている。このような混乱の中、ワンデザインクラスやTP52で代表されるボックスルールでのレースも支持されてきた。世界統一ルールの制定は世界中の外洋セーラーにとって望ましい姿である事は言うをまたないが、その理想の実現への道程は厳しい感がある。ISAFはUSセーリングにもアプローチし、この方向への同調を打診し、良好な感触を得ていると言う。ORCの年次総会では移行へのスケジュールや考え方をある程度明確にしている、2011年に合弁会社を設立しマネジメント体制を作りORCとIRCの証書の共同発行、技術的な開発研究にも着手し、2013年に世界共通ルールの始動、という話もあった。しかしながら、両者の現場サイドと直接会話した結果、ORCの計測委員長のニコラシニョリ氏は「静かにしていただき、という指示状況だ」と答え、IRCのマークアーウィン氏は「統一ルールの実現には程遠いであろう、日本のIRC関係者には何も心配するなと伝えてほしい」という事であった。両者ともに方向性には賛成だが達成までには、政治的な駆け引きを含めて多くの問題がある、という感触であった。当面、静かに見守る事になる。この件の進展については逐次オセアニック・オフショアコミティーから逐次報告が出る、と言う事であった。

その他は、

- ・マキシクラス協会がインターナショナルクラスとして、クラス40がリコガナイズドクラスとして承認された。共に2009年に差し戻されたが、本年承認された。
- ・広告規定の変更に関しては、この委員会としてはクラブやノンプロフィットレベルの外洋レースにはこれを適用しない条件でカウンシルにあげる事で、承認された。
- ・ORCとIRCからの2010年の報告があり、ORCの証書発行数は伸長し、IRCは横ばいという内容であった。

<ORCコンGRES>

ISAFの各ミーティングと並行して、ORCのテクニカルコミティーを中心とした各委員会が開催される。ORCの各委員会が終了した後に、9日朝から各国のコンGRESだけのミーティングがあり（EGM）、その午後にオープンのAGM（年次ゼネラルミーティング）が開始された。

こちらでも、ORCとRORCでの世界共通レーティングシステムの動向が質問され、討議された。前述した事に加えて、2010年には合弁会社設立に向けて両者の財務状況点検を行った事、2011年には新しい組織に関するサブミッション提出、世界共通のISAFメジャラーの設定も提案したい。などの具体的な話が出た。また、新しいレーティングシステムは現在のORCのそれと同様にトップレベルとミドルレベルの夫々が共用可能な2階層のものをイメージしている事、ORCではORCクラブとIRCのシステムを長く比較検討してきたデータベースがある事、USセーリングとの関係調整が必要である事、新しいシステムへの戦略を発表していきたい事、が回答された。これに対して、コンGRESからは、移行へのスケジュールの公示、信頼を得るためのスケジュール厳守、出来るだけ速やかな移行の必要性が語られた。

総じて、ORCは非常にポジティブで、RORCは慎重である、との印象を受けた。

ORCの2010年の状況は、証書発行数では8月末集計において既に昨年実績を上回り、数年来の減少傾向から上昇傾向に転じており、財務状況も健全である。世界選手権大会もヨーロッパを中心に開催された。

これは、ORCのVPPが安定して公平なルールであるという印象が支持されてきた事や、ウェブサイトを通じての運用などの容易さが評価され、ルール変更のサブミッション件数の減少も安定したレーティングシステムで、良好な運用実態となってきた事を示している、とコメントされた。

テクニカルコミッティーからの、2011年のVPP変更については軽微に止まり大きな変更がないとの事。その他では、

- ・ 2010年の日本への証書発行数が約100と減少し、従来2名のコンGRESの枠が1名に減員された。ORCの新しいコンGRES名簿では、小林が継続してリストされているが植松副会長に交替して頂き、出席が不可能な年は代理出席者を指名する、という方法も考えられる。
- ・ 役員の改選があり、フィンチ会長、シニョリ計測委員長、ビビアン秘書が以後2年任期で再任された。フィンチ会長は、ワンワールド・ワンレーティングシステムを軌道に乗せて交代したいと話した。
- ・ ウェブサイトでの便利な利用サービスの開発について説明があり、ORCのデータベースから特定の艇の証書を取得したり、証書の数値を変更してトライアル証書を取得できたりする機能が披露された。

その他：

- ・ <ロレックスワールドセーラーアワード2010>は男性からは、オーストリアのレーザーとエッチェルズ級の世界チャンピオンである Tom Slingsby が、女性ではスペインのRSX世界チャンピオンである Blanca Manchón が受賞した。
- ・ <ORCディナー>はアクロポリスの麓で、ライティングに浮かぶパルテノン神殿が見えるレストランで行われ、各国の外洋関係の主要な人達が出席していた。旧知のRORCのアドミラルであるクリスリトル氏にも挨拶ができた。
- ・ RORCの現事務局長で、日本でも知られたエディーオーエン氏からは<コモドアーズカップ>への日本チームの参加を強く要請された。同レースはIRCを使った3艇で1チームの各国(地域)を代表するレースで、チャーター艇の斡旋を含めて支援するという事であった。
- ・ USセーリングのゲーリージョブソン会長とも親しくお話をする機会もあり、山崎会長へ宜しく伝えて欲しいという事であった。

以 上